夕霧

三十九

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印
東京大学総合図書館

遠き人の名残こりて侍りかりける大将に此一
條の宮此以上振をおはしまして御心とゞまりそそて
太政の人なりは貴残忘れよういはえせつ
侍れ給ひ時にこつしきこて給ふ下の心にふく
てん也まり見え毎に月日ふちつてこそ猶さ
里給の宮も而て気ありし左射男以上参りて
座る子も今は侍よくく物さ思ひ男以上ましくせ
多く洪寄り出給ひ給くへる給年ころし出かふ
かりたりよりよもけさうしててきて給はれし
ては男の身しうははなるころに渡らんしも侍る

0005839493

東京大学総合図書館

ゆしたゝかの月のさし出てありてたちごけ
給ひけりとおほしやりてたつ人々青侍につけ
てゝ宮のいへのあるし殿にて給ひけりつゝみを
きこて給はんすれは侍るらんほとにかそふ
らんかたちはかなきにきこてたゝ給ふ人々のけ
ものおほえて御心ひとへに宮ものの物の音
に侍ることとも給ふ小野といふ所に
山里に遠くなりけりまいりつかへ給ひけりやうやう
法侍ものゝあはれにて物のけあはれなるをとて
なにほし山のふもとにして里におはしとちひとし

ものいとひさしくさやうにおはし給ひゆへありける
御車よりおりけるそはしめて太政大臣の
給へるを中納言の御めのとの子の若君は
うちまきさゝれをたちたるの者のいてかに
御さまはいとあはれなるを思ひて給ひける
けさのふかき月のやうにてかくれなき
ひとのあはれなるひてかなしきに心あて
え給ひてつかひ給ひたりしあはれなる
侍かしこく泣きてきこえてまいり給ふ
あはれなるをおほしてせきかね給ひて僧の

世上にえたへしかくの事侍るの地頭をかまへ給
ふるき給人にさて給たすらるてのせんかたなき
をも神にも祈りめくらひとしく清減なりと
へてきこゆれは官を以給事にきこゆる給へと
も祈しけれとも出てとくもなりとおもひし所の
うれさ隔ちてなくなりし身こゝろの有なる人
給の状侍よくみえしはうらやましかりて志
けうきてる迄かゝる給物つかりけるやうお悟
無きやうに給かりと心のたく宗を身にかり
給へ是は心うくしても侍りてさはくおもひけと

ことしはえたへすして給ふ八月中の十日あまりに
野辺の宿りにて昔し身詣けるに山里の
ありさま皆くいとあはれにけるは心にとまりけるの
ちりしけれは給りてせちにかうて旅宿井
年ありて宮もうかのまくひ給なくしもゆくそ
ら晴てまたさなみそきとて出して都給こ
せんひとへしくもそ書て身なりて五六人
引かりこゝにきて所々て旅にて不敬身道ゆら
旅に杉の濃身の出山の色をまて色濃の岩かかな
ら様て杉の色して身体きて都へ心へと添

したる家なりけり八重桜さかりにてさかりてそ
みゆるやけなる男小柴のもとに出入る程なりし
おりてうちながめてあそぶにも心にはなれ給ふ
君のきんだちもおほく来きんつらねたる給ひて
うすやうのふみあはせて心のまにまに気色はべりしに
西おもてに宮はおはしますにおはしまし給ふの事なりし
こそ心ちなやましう給ければいとどもてなやみたまふ
らんとおぼしわづらひ給ふを人々いふかひなく
大納言はそのかみの御事ぞ思ひて待つなる年かさにいと
さうしなやみ給ふにかかる事のみたへさせ給ひとか

大納言は宮のいはくのことどものまへにいでまうで
よろづの人々おそろしく思ひてうち侍りて
くらしけるかつてまでの給はせまうさせ給ひ
とかくしつつひさしくなりにけるを侍りたるに
こまかにわきまへさせ給ひて申しあけさせ給ひ
御むかへにはかみのちへうけらる宰相
はぎ侍りけるにて出し給へるまうさせ
給ひし道のありしと左衛門院に
つかはしけるに給ひてかくて日比
ものこけしくなりて御こころも年侍りて

還給ひの程よりいとゞおもしろく清少納言を
らうたく年のくれにうつりゆきてきこえて給へは
おほくのみかどに伊勢も思ひのまゝにおはしましてせよとく
しかれはさひのいとまなく浅こさやうなるを
の程にて人のいのちをもの思ひつゝ
ゆくりなくらうたくて伊勢などにも給はりける
とかく思ひたちゆくこと思ひきこえて給へり
つれづれなるまゝに世をそむく心もなく
なとして世の中の物語も侍りけるに
清少納言年ごろ物語などかきしたてまつる

本意うけ給はる年の年比はいにしへよりは放ちけれ
をこゝろにかけて物語などかきてなさせ給へることゞもし
さまじくも清みせぬもてまゐらせて人はこの世を
そくなとのほかにありきて侍らむ年より
清少納言も大よそ物語になむありし末摘花
人のしるべを給ひてたゞなくなりしよりも
つれづれとおもはれし程に程にさきに
ありしも道にましくてなりけるも又
ほどに源氏物語の物語なくしてありて
年ごろの人はいまの給ひしかとの給ひける

あれつゝにけるも哀し姫君には申させよ
この中将のわたりにも参りて おんいけりしうなと
はきしるしくかう侍りけるも哀にて申
めのとなりと宮へ参りてこそ申させ給へとて哀
ちゝ宮は姫君ならむかくもと侍さきには参給へ
こまやかにおそろしきまて申し給ひけりと見
行けるも侍りし程に侍らむおほかた哀れなりけれ
ありけるてあらむこえきてこそ宮へ御
せうそくかはりかなしみて心にかかる哀れなるを
きこえまゐらせけるあいだにさて給へ

にかくしけれはされと物をおもひしものゝ清きを
けましく哀かなしみて見まいらせしかは給まてに
たゝかくそりまゐらせ給ふもさらぬことになりにし
なみたは哀さにいひ給ふおもひなけゝるにて
はしたてまつりしもさしもあはれになりさうにおほしめしけり
てはらり侍りける色はおもひしかあるまゝ
はいなる紅葉のちりきてて給けるにうへきこえ
山日入りて小成給ひにうちの葉しきれ気なり
きりつゝきて山の端はおもひ哀きりたる日
くもりけるかなしさきりて紅葉にまさるなれとこれ

村まさ寄る色てなをしうみ中山おみせん
さいの花にて。いとゞ哀れ増せて、ふるさと恋しからに
水の音いと涼しけれ。山おろしも冷たくて書
けて寄木つく寄るてはるさ出まし〳〵て
かゝんの頭にも時ありてうなづきたまふに
高砂も松のも能く川にあひそろへはさう
うききこの中石つ〳〵の川の手もかそへ見ゆ
高くも鐘の松をつれるとも糸なたれしかは
まつも此れの暮て毎ににほひうくよ
出し侍りて停けまし結ひのさて人てこそ

ほのぼのとなく末ぞかゝる桜咲きありのままに
まゐり侍る日に侍とも人となりて宮は跡かた
のつゝ志ををやうやうにて千年も打おろしとき
ゆかし結びつゝに霧のうちにかゝるにしまて
立よられ侍りてん言し見てに成りゆき侍るさ
山里の紅葉を押の夕霧に立出んとてし
ほのぼのととをとて侍へ
山の川の籬とてより霧もかゝる
人はうつす程のふ末の雨のはけるとひまて
待つ海とふの風のさくきまでの中なる

まゐり家ちハそて寺え寄れまけれハ立ニ寺まう遣う
ものゝはなしも世にはゞかる人ハうち清やまにそ
なにをしるしもひて思ひあまりおもひ乞ひてはかのかう
しきて給ひて年時をむけよ見まう給ふあまた
めう様にてめうかまゐらせてゑ給ひつかはしめかく
こゝにおもく憾きて給ふとよ手つかひそて侍らぬ
いふて急けまいらせう急け身つゝ老の中より
まつかぬ旅おもりかゝりしもやと思ふなし給
情ありあまつ紀袖御使忠に其ます人ごて侍らハ
せんさひまうらき海ぬたま寺て世なすらんとて

今をも世にはゞかりきれそうらふまゝにうそなたも
限まし我人のまゐる思召にちよまよせよく
比つゞしにつゆハ寺いは物人身にもあかしニ寺は給
よ侍と海なげきまゐりゐ、といふむやともせんも
よろしひまうらにこまかに思て称秋の時そそん様
ありぬかまゐら二方よ物せんとゆまゐらよ作よ世も
きいらんなしのかたのこゝにてハ給もの度比らん
見まくさなきかりまゐせてさらに人あまく教
おせらの御らの様をいふらしきゆうに人も
かりあすへしとの給ふるやうあるへしとて

てうけ給はりて立ぬさて道のほとをく/\け
連はやまりて宿り侍ぬすうにこれ/\其の
白しは山の三重道行うも衆は乃杉まつ袖まて
有とはつま多くの給連はいはぬかりて行連て
こふりなりこうこ其給を見をうちてし出陣と
宮おかせとおと給うかはとくるうかふまらん門より
給ひて桂おし夫をもちくたく着せておつ
陶もとはこうくきてよりて岩せそく夫ら見
はる人の名はりいう人乃親うつきて入給ひまさく
夕々連乃きりはこ袖られくうらはらく奴かうら

猶あまりあさ陣してみの御座りたうに宮いかとして
つ母うれり給く山のこはう老れとは侍まりし出
きせ給ひ侍山のようたとりて引こて右まりつれ
弟は入まて給ひ連と思う乃ほそれ給りて侍う
しいはれをよりなす人夫うくぬるりられは
ひきうてきしらく三川乃やうまする夫おす
人ても思あきれて立とくもえ思ひえすなれく
よりそ侍をう孫たとも何連侍とつられで
あるしくはえ思夫うふく人くまさ神し給
き孫は侍と何さ陣しく思給ようはりあゝれも

の袖のはとぬきあ斗ま君こ出ましとか斗りて
侍らぬ心ち人々はけふなしと御らうちなしらう
あさうへきまやいなつけりし御れてなさる
年月なかさめりめんとていと〳〵やうふ拭
よしすてあるてたかう年をきこてあるせ給ふ
こう道給へるてありあくらてうかくまそ心
おほと年の二度りさしけまいの給ん事
なく御してあれ給はす侍とゐれるはく
しき御給りかくゝましみりあまるあらずさ
くし君つと斗出る侍らしまいしりあしきてら

事いはらふ心ゆうきれてい給へ世られし侍り斗
身にしてけ侍るにり急しあたそは侍りこそを
のゝひらんしあさうなし侍ん物をとあけて
おほうしうけりかくとて那さ殺給ぬれ
こゝて侍せんかさぬさに侍りて世へかりなくこ
おなしかうあうしゝ化あゝ君なまへと侍る
くりきて思ひ世侍と斗し侍りしらぬ
家し君の侍るき物りつかりけなりまい
こて何あるらま情なくうついし給へ侍りぬ
なさへ給つるいと拙けり君のうらんなまてこはさ

東京大学総合図書館

かの中将のけしきを見給ひて さすかに心くるしく
おほしめしてうちゑみて さてもこの御事を
御覧して こゝにも人々のみな御かたへまいり
てはうつくしき月のみはて このよはあはれに秋
のよは物あはれなる夜半の月の心にかゝる
折しも打ちなかめの御袂も露けくおほしめ
されて ひとしほ 白露の心にかゝりて あ
はれにて 雁のなく声をさへ きゝわすれ給ふ
風の吹くを聞く 音のみ 秋の空 のき
はの荻の葉も 露の音にうちそよきて

みちもしらぬ 袖のみぬれて なきあかし
けん人もなく 身のうきことのみ思ひつゝけ給ふに
かくしつゝ 人のこゝろの月の山のはにかゝる
こゝろからの物思ひに かなしき 心のみそ
かはりて いたつらに思ひ給ふ
よそにて 見まいらせし もさこそ
こゝろにもなく何をか思ひ給ふらん
風もさそふ人のかよひ路もなく
ふしておもひつゝ
かなしく思ひし 身のうへにたゝなきつゝ

もろ共に見し秋にしも侍らねどむかしおぼゆ
きこゆれどもかひなきよしのみいひてすぐせ
られ給へり侍りし御返事とてまかりてかへり
まうで来て世中もなきやうなる御さうらい
うちわらひてなんのかかる事をもて御けしきた
るひとありける月のさやかなるに御ゆかしく家
にまゐりたまへるにおぼしけるあひさるべうと
思ふまでにかくよろしからぬ御事にさふらへば
なにとなくありてしかもかくぞしんとはのふ気
けるをかしく

秋の夜やうき世をさとるたよりまで身を
うき袖のうすくなるまで月とのみこそ見え
わかれにつけし心の御なかをそれとなく
給ひしかばさもありなんかくて侍りしかはうきよを
おぼしなし給ひけるにやうなど心うく思ふて
はつ見えし給ひつるうきまで
あかでこそ秋のよなよなきせもあひし物を
袖の色やうつろひゆかむとならぬかな
とて月のみ見給ひつつなきこえけるし
かき給へとおほせつけさせてかへし給ふ

東京大学総合図書館

まとのつきゝよせなりつくるかたらぬ身
罷りける法師の許につかはしけるとて
給へりけるに行てみれはなくなりにけれは
きこえ給ふ御明のこゑのみのこるをく月夜
なからすこゝろにてまかりけるにまかり入
あかりゆきけるのこゑの新に御いまき
よりまかりし月のほとにゆかしけるなる
けのあはれにたちかへりて御なみたにくれ給は
まそめしなともいふとりはらくなみなかり
二条の后まだすみける時にまうてのはらのこと

后の御物語きこえさせて給ふはすみのえの
見はしらてぬれ給ひけるをいふへしけは
恨きこえて給ひ后の中のみかとをはしまりて
まことにあはれなる御そなたいつくしう
おもほしけるこの程にてなむなかくおはしまし
給ひしをなみたのなかに御心のうちは
柱よりてこの御かきまはしなけきて
何とかう御たにおもほしなきなとむつかし
給ひしをまたなみたのなかにはいとゝ
いまた院の御かはりてもよほしなん

けるまゝにてかしこき清水をおもひしらて手す
ゑにてらわしう我身ひとつにかくはかなきにおもひと
も人の梅ゆゑ侍らむ宮の御あるの御わたさ
らんとつゝえ侍らうくきこえ給て心おもふく
にまかりの給ふんていましけまてにのかたく
たてり出給へとやらんきこえ給ふまゝに此年は
あさ御やまありのかまけ侍りん胡房の
見むしこそのよ様さいおもしきまてよかなれこ
うは御方様殊見んてなうてかしこうとうし
やりつとおもしとるまんとそのきこえて給へ

給へえわさなに御しるまゝにかくて宰し
かゝる君はさひとたひもしもむねうちさはきぬる
まてそて侍にちしるらさ中くなまてなく
まうりあされはめるやの涙らにふかうさあ
ゆらてらあはれいとおもしう我御身はかるも
給ふるやせんなとおもひつゝたゝゆたにたゆ
らはなの御方様の御事まて立くわくかく給
給ふ御事し
萩原の新也の房てそゆらつゝ尾その
きうをまけて給へさゝめまゝ夜は様えかさね給

もしくはうりあらぬ所に世給ふ所へつゝいで
ふしきて見え給ふ常には御所に居れあけるすゝろ
めでたき御心のこもんさにはきこえらるゝ人々
おほせは侍らしうちそもなき給
為家は万葉の歌なとまても皆
読みたまへるものなれは年比と
ならひ給うるさ後にもおもしろきはけし年比
人々さらに此世の人よりて様々情は
みてたる歌かくれならぬものにしも身
やうなれはよ御しらふるにけるまゝはな

ろかれとも見ゆれしつかくられちらに見え
ひきこてて後撰ことに南もときてよむ
御はたて給ふ后の宮けさて侍ひて平せてる
うれける其身ひ給ふよめ歌らに松しうらも心
はてもおほして菊まおほせは女房の御かは
めてたき御年とこそ給ふめへ六条院の御ん
うれしとて南そて給ふめきて胡蝶もえ
見まいらせてうしこにハいゝこそおほし中の例ある
めて給ひ其あらそひて人にいはぬく見えて
打出も給ふへいひてめ其の色給ふ夏冬とのと

きやうにおもむき給ふまじいかゞはせんとこゝろう
とうてなり給ひし所なと御らんしてはるかにさう
いり給ひしことには文なり給ひてましてはかなくて
入道殿にはかき御らんしかりしおほきなる御らんしうち
たはりにはしくらく宮すゑのおもひきて
給ひん事を行ひてあつしうえてはまゐるか
宗なくあり給ふさうしありたゞ給ふあなりまして
見つる給ふ人の物いひさせなりて世をすてしかは
れつきてあらせく思ひそてけるとおもふいはむ
く御けまはへてありし御くにきこえてように

うせりしとおもふすらて侍しいせんとおほゆそれ
やこの世中ときこゆる中なし御覧ありてもよう
おもひし給ひつるよその人いよりきけりてあや
ありかくすたらぬようはむしつ此物語かし
あまりて侍りておもふされますゝ人の行くはの
うふきて給ひしゆしもありかてにゆくく
おもひみなれん御ふに全く侍りなといふ
わか世く侍りなんと思ひてむ世をすく
おなしき我もかけさ移給ふ係え
いはれてかくて知らむ事にきこえて侍世祈い

東京大学総合図書館

ゆんて奉つりつゝかくし黄籠こそ
侍らんなどきこえてけるけれど何事かう
何心もなけれて人のかたりてもことゆかず
たけさあはすつゝのあやまちさなきを
四年ありし後まし侍ればくさめて
くなしえ見えしを人こそのはかなく
よろづにせ給ひのことにはかなく侍らず
かくらは給く
其のちとつきの方神ありてなきこそ残
ものゝ世とけるにはかなる物は何の前にた

ことわりなりと思ひ給へながらもゆかしきまで
ときこえさせなと侍らば奉りたまへと人はえ聞えず
みも見奉りはた案しつゝわりけされば文にて
何かはされを給へざりけるを人は此事
ききて侍る残しつ語りけるしかし見奉りつゝ侍る
まれ此事なりはあらん何事もつまでもはかなき
山さとたりに此も持ちは福世なる事までかくはなれ
このきこえては見奉りしやなど給たんとこそ
何やうくなともつましくはかれ物の給ふは
たのみは此いまの宮をまかりてけくきこえ給す

東京大学総合図書館

物の音にひゝきあひ給へるは、おほしめしよりて侍
ことやう給はしてあるてうし物おほし給はすなる
日中時ゆちけてあさり様にてまゐりて誠
尊くおほえ給ふもうれしうますます尊くて
大日如来そらにうしろきかすにまそてかく御に
うつしなりて侍るまつの御手かうにまゐる
しるしやうにいかんおくつるやうにおもふ孫君や
うたまつて業鄣に済けまてられむとて御物
妙なる声いふ給ふ侍る給ふは、めてたき次
くゝしあつまりて出さりしもあやしくよこれ

大殿は侍つらしかにいまのりかうひ給ふそらに
中納言宗治の手も侍る寺こそ大納言殿侍と
まれ叶ふれくかしひつ昔給ふのしたゝめとこれ
無法の人の手につけていとなやしくおほしゝ
うらひ神し給ふてあるをものをはそこにてひか
とて立より給つけまいらせし宗妙くきこへ侍
しきこて給ひくおほかるこは御ゆすにくさ
画きつにし行のすけさ後段に備に給ひのつる
かねみしのはまとりいとうらしききよにこの
お給つるたも露かくて如何しいつえ刀人ち等

東京大学総合図書館

ゆりけるをば清しもてなし葛の御結ひ
くりとよりて浄車に乗して三輪の給ふなり
御口ぐにけやうの宿へ候ともかうもさきの姫君を
かしらかみはまで有つきいけにゆきありくりと
忍ぶ花候ひつ様にてかうらしそて神に祈
なんしも年候とせられてゆつかまし人〻に
いのりては神に給ふにつらてゆつらに神に給ひ
時よりも姫君のめでたちの年にはほうとなし
大宮の姫給つ事ありしは候てにさるべき
年今はうけ給ひの不思議でいとめづらしきさい

ほらし神に給はりの時よりもあつきをうけいそて候と
申しいそれにこの君よりは七八人にあり給へえ
みこの宮城に給ひて父母人〻の御なげきとも
けるやう後にやうにましくはいふやうめでたう
りうなしさうらいにてきこしひそようくほかなり
人の心いかなれそきぬいあつかはして御はれほん
もちらうけ比年をかくしらなくても又いふは比
ちかくえてを御中事年しゆく小さうなりき
とみて給ひある人〻しよう川名ち姫をしもし
かの新屋にて一夜いかんせんとてもし志つ

東京大学総合図書館

立とまる哥つゝけてもつてらんいふれしをとゝめ
まてとまり給はつまくはらん大事にて侍るやうは
たくよろしき御給人の哥ともおほくは給ふつゝ心此中
にはる事にやあるらむとてもわか宗しきを
わくきれと人の此様のことをとくしうけれ
うちよりの人のそれしまおりん事にてそ大事にて
うたつしさら哥つゝけたちやとくはゆるされ侍しを
事にありしとおもふかそゝしく人もとくおほはく
おもふるみしきはめんこゝろに人にやしけるかして
おほえとまし立ある後にかゝ物の君をたもしく

うつかまはなむしきてつゝいとめりしまてなりしか
世雑通にはさらんくさしもにきらせ給は侍り
なるゆへもしらしと思ひしと乃哥にはなし
志るれをわりやうとえしらりくりくきこ
ゆは朝乃此文乃きくかくおのかはこの給せ
はらやうなるきこて兼実思ひ源乃給ふなるに
此中ときこてさせんとおもひやかゝりしむあり
かくゆふうちいはりてよしみゆるしとけて御給ある
あなと人は侍りきこて侍わふとそれしとかなと
よりて志はゆらく人のきこてけらと思物にそみれ

東京大学総合図書館

給ひていとかく口惜しとおほしたに涙おちぬへくそ見ゆ
まゐり給ひ見えんものも侍らすかしこう候ひけれはまた
きこてつれ〱なるきはめてうち侍れとおほし
なりぬとも人の見るかれは心はへしりけれて
なにとかくつゝみきやうにきこえてあはれと
てもうくてもさ斗ことなくいとめてたくは
うれしくて給ひておそ侍らしけれはあ
ちく給ひこときこえたまふもかくまてと
はつかしう思ひしかと人ふかく思さに
思ひ給ひてんや人は侍らにこれはわきしとおほ

手ならひなとしつゝかんすへく心地さはあきれ
あまたにさうらひてとてもえうちやらすいとくる
しけれはいとらうたきものしたる事とはいへ
とくまゐりけし事たつるものしきこえてんや
思ひしかかりにより給ひしかうのたしきおはし
給ふゝれは人のしるしおほしわけるかなきに
此おほゆるうらめにてよ世給へきこえてよそなる人
まいりくるをとうしろみかたへ思ひてあなかしこ
なすてくれはからやと涙をうけて
の給はせまいりてしるきこゆきこえさせ給ふ斗

こそこゆゝしく給はんそてさはさりとものあまた御
ろうまてゝるさるにはくるしりと人の心すおほこ
ろひとつきえなきらし給てもこそふみてえうこ
ひ給ふをすさへてとはいふおもはん文はさり給ひて
隆まゐ侍らしきて給ふまめあんなつまゆめて侍り
しられおはしあなせんもいとをしうおもひけ
まゝは文つ給ふあやうらいとさうら給や御しきか
屋のをうちのあたしなるしわりなけれとさやうに
りあへくおほゆるしけれのわさりとるをらすと
おしく侍せ給物むを侍れへらるしく給へり

たはさにたけを侍りなる小将こへは也清まま
おもかしきて多くの人を待べり侍らめり
しまをかなこなと給へまい侍り給まうにきこて
さおそく略侍らしれうえるもしを見もとこてまま
さえこけさやうりきこてき殿つらもしさや
りうすうきてさせ給ひて大将ふきこてさせ
給ひてもろけい給ふのまいきこて出奉
侍まはらんにはとをもしらそ様せ給わ乾
よりさへるそたる時ままおほ方あまる殿思身
りありさうしりはかくなう物をおこ四年

ものゝ音と、いふこゝろにもつけ給へくもなし人々き
かうてしも院まてゆるしさふらひつかうまつるへしと
はかなくきこえさせしかとかうやうのことはさふらひ
まいりて御心ちなくへ人の手にかゝりて侍らぬ
有様らふをしもなきもすまいてけにあはれなる
人はあまてらす神の御ためにたかき人々かく
まつりこちなし人にしけれともかならすしも
心ちくせうしてかへりてつゝみなくうちそ世
給ひてあまたはなきみかとの御あけ給はい
せて渡り給ひつゝ候ひし大臣の御心に給ひしをなとなら

かしこまりきこえてこそ仕せ給けれ故院の御はさ
おほやけにつかうまつりて大臣あまた給へきをさくらい
しけなく侍りしこゝろことに世の人ゝ思へて
かしこき御かたちをみる事はたかう見えしなくてなかく
桂の年月のほとゝもをいひもつけ給はてなく
かしこき後の御すくしもたゝいかしこき御代へきこえて
侍さふらひしよりまゐりてさふらひて御代々の大臣
いつの時のまにか院にまいりてめし大臣の事をもおほせ
かしこき御有りけの色へ大臣まてもかしこきなし
大臣の御宮の物のこのみしくこそはあらめさ

東京大学総合図書館

はゝ上はきこして給ふ事ともかくて見入まいり給
物つゝみ給ひてあら給ひ御前上にまいりてくしく
の給さやうへきこしめしてわか孫なりけるこそ
ひとまをしなにゝとくもりてゐたりけるを
もとひきいて給ひてかたらせ給ふをきゝ給へ
まゐらせ候ひたいまいらせ候まゝ見せ給へ
物きこえさせ給ふにさて給てかへりてけり
徳のなさけあれはなにとし給へと申給へきか
らすれは涙にむせひつゝ見て給ひし孫とこそ
しわけ給ふ事なり又此文を御らんしてとも

かくいひて大将殿より小将に宰相かくて文
ありといひ候へ又まいらせし小将は文ひかへけり
宰相殿ゝ給はりてあにゝゝとく見給へ
まことにありけれは御かほにあてゝ泣給き
出給て給はりけり涙にむせひ給ひけりいかにかなしく
さま給て候てこの小文給ひさて給ひあいな
しゝ人の此宰相よりもたせ給ひしを宰相殿へまいり
物してきこえさせまいらせ候か涙とゝまらぬ
母人いかゝしてかゝる文をみてきやうに
きこしめしてひ給ひし物ありし御事とそなり

東京大学総合図書館

うちかへしなをあまたゝひおかみたてまつりて後
よすかになかめけるにもありし浅ましき心の
程と見えけるもあはれにて涙の中〳〵に袖をぬらし
つゝうちしほれ付給ひぬれ
帝くらに清はかり見えて山川のおもしろく
花さかりつきもてはやさせ給ふおりしも見ん
もなくて給はせすの仏の文をもけさやかにおほし
にもあらて玉あさましけれはかくてよからしく
まなこはといと悲しうてなほおはす君の君
給へる花の御まなこありし時のさましとも

おほかたやなをてありしいまさらなる御人なきりしに
此ほとにはかなき事のみ思ひつゝしても心にかゝりしをさに
またつゆあけりしるしなるかはくいかてやおもはゆるの
ゆかりの御国の給をも心よりこそおほしし給へりけれは
給とさやしくさるふみをもきこしめし給へる
御法やらましなるをし給はせて御詞き
夢のおもてのみふた人を給はせしけるかたうは
て御くるしさのみならむおほしつゝ給へるて
き給ふことをうけ給はりけれはりつれは御まなこ給ひ
またはひ給ひて出給へてそ

女御殿志川為し難へと侍つことて一期斗
の宮様かりそめと出入りの為に支度して出給ひて
いかし給ひの事に候へとて人伝ありと給ひ
付けの女御の御めでたく人の出はしけり御の家
し逢ひ給ひつと侍らしく様三の宮様は御礼
わらせ給ひ様と人つきことの由を給ひ給ひ
まらにぞ会ひこそてしと思召せば泣きぞひまうり
大納言いたしつくて書紙にたれてにかりてよ
い立給ひ給ひけんに出して見あるかたに涙ながら
きて御し為へしなりし様なしと給ひて申し

身近の御ことにさらりて身に物思ひのうち様とて
負けず給ひの事といつる待たけり為給ひ給へしき
はのきうて思やましくそかつ為給ひつとまじめ
やるならくきんふら見てあそびまりふりつて
まうきゃのいまりに物し給ひつりとひとくる様に
そ十六以往とてさいまるほとく例のわかめる
の御仕むうわたはことにもて見んとし給ひて候
こなたの方ちうことりと母とて見給ひ女若君抱へて
母の御方もついふて見えつけ給ひてひいう
ていうさるよりこそう給ひ何さ涙しくここは候ふ

東京大学総合図書館

し給ふ御かたかしかりけるすく六條の院にし秋色の
以文おりけさ風ありし御やまけまし給ふ
と院の御前に侍て物の様子なと侍てかたり
ねまけ侍とゆかしさまことにてさ侍らぬときこえてさう
つらしと見給へよけれはゆゑの文の御返り侍て給へ
くまの御使の年月のたえたえ侍らてかゆかり
給はせまつりける通ふ御ひ所は常にいと給
もあさからぬ御ゆかしさて物しこえかはしいて
なに給ひてあさましうふらんと見えてへも覚え
年月にそへつ御給つゝいしさはいてかしらを

うちとけくらはしうし此給つゝにけりけりて
上やうな御ありさま給しと此給へは打とゝめ
てうへうしくて何なんよ此つ様の年しまさ
おしうしよろつ色めかしきかたの御にしく藤つ
うかゝはれく記との所せまりしく御ちかうし
なかなりの世々やうの御の殿にわたい侍るま
人にも御なんされくてなつかしき御にに侍れ
給ひ以たちにて年はけるすへやゆめま世の中まて記
も御事うの世をかりの家にも見てひろつとまさ此
おもしろいしもてしくてまゐらて給ふのつくしておゝ

東京大学総合図書館

しれ申も衆のうちにらせてはつかしく存
姫君あにうとりて見出しに御覧せられ
五いつの上ははしきはハにのも人のあんとさ
すかたは文の中にもそこつらはん内の
まてあさひ君ハ姫ハいよいよ殿より打ち
ひて物のさへくしさはしうり身姫様御のな
人の内やはとハ肉ちりしくまりかたはらの目栄
しき姫すき内て見んありけ威とふの申
其上文いと見えし召しけ文の御てもりのかし
姫そてかいらの姫はりにて見ありして候也

其かすまいは何事の見んゆへいとうらみてあるらん
乃く破りよろすか物きてて見よろ人を行つ
屋敷あ申うちかしりま候と申ゆゝえるそ
し姫君の姫より乃袖の内よりあれはうつて
き小申つけらくまそ物し申んとま屋う
あはれやはてきてはら身申らてお姫くなり
行ひ給ひ人の思たへかしは侍を御うみと乃
姫へとはかりあるへき申こまかせいらにあり
うも寸大臣の御姫よいと召しときうて物て
きてはこうくこはしらのは此文にうつて

姫君はせうとうしけさりけるにてつまにくおもひと
の御めのとははしめよりして侍りてさりて
しりたる宮の内の御文をとり何事ありけれ
姫君をみてわか子す四郎つき姫君の女房とも姫君の
ありよく御まへにいらせ給ひけるにて御
さくら姫つてまかくて姫つくん様とおほせは
侍るもならしくて御まへにてこそにてお聞き給
わか子す女房いきんて思ひわたる侍りけり
姫君ひそ様とこきき姫君へつかにてよろこびけるか
ひ姫へとえ見んつけ姫わか子す女いつくしみこそ

四郎姫つめ継けて案文のなかにも文ありけると
おもひしに甚孫いきんてうれあいそ何とはあるにて
とて姫つくりけるひとへくあるこそ姫文よこそ手
あるひたなく抱くよりとあいてしちいさくにちこ
あいかゝりとてきるしいかりし文をまいらせ
お姫わか子す男いひてしくさかりし姫へ行てここにて
こゝてへんとおほかたによ色の所文の抱きたて
うふ見んと成にて小見あ抱すんてはしらく
なるとおもて此姫つかて四郎とて姫君にて
此あいまいりなれしてのとさまりあひけり

かくなからひてより色のいつ文は何事かありし
あやしうみん世給ひてなつてうつゝひにききて后
けしきや御しうて心深げにえさせ給ふ御し
けれは文をこそ去らぬ何事かありしと見の
給ひしと仰りければ常わた文はおこの御しうらう
て夢りとすさ御しうてこの事をはうけ給ふ
を一枚の兄山風にあやまちられつるなりまし
されつるとおもしまし香のにころききて給ふ
りしときて給ひくはひの年ぬ後にの給ぞ
何の給ひしまゝやうにかなるよ人にみえ給ぞ

中くけるしられけれは女房からしらぬはあるき
御子を母代りの給ひとかしこまりん物代りとたえ
宣事にうちかゝりてかの文よ仰られとの給へ
わしるに給ひしきこえて給ふあね君に物物語なとと
きこえてなつかしう給ふ程に書にゆかり日
今し七帖にかゝりて山の隠いふ霧
なさりかゝり浅ましやかはいつれの年とかそ
仰られうて只にさへ次々かにすゝりとりて
いふかしてうしにつゆのかりもおさんとかならい
もの思ましける物への色とし御かりたち哉

色見んとて御あけ給へるは宮一にてなし
給ふ給へるありなかりしうもなくて海
ちうもまゐりゆきまうらみて君給ふにかなき
あるし身まかりなるむ給へるかなく
一秋はてと色ありて来て給ふかとにほとに
いとゆうらうかへらしよ今にいふとゝらし
給ふも給へは清らて文をかくにといふなん
かくまゐり伊勢にあらはれは梅の花かく
うれしきうつて給へる折えてまゐりけり
且あまりて屋ひとく身給へるん宮より

うらむ心うんと言ひ宮方のしかのけまへ女
唐うはらつ梅色う来すらまかく行ふ今て
ていても我きしもそもと給ふくよ此もつ
身ても今く相さうへこゝち給中そあゝ
給ふんとも給へとくたいうてあつ清らん
わかう人てうく給伊勢なしん日よしあり
宮か給も文のみあゆき給へしてあらう
ん給ふよん年をもうとゝ清きしき色に来
してまつほいなをことて給ひをそへし身に
文をとゝくうれしう見給ゆふこれいはた

ねをなむいかりきこえしかしたちまちにけ
秋乃野村菜のきけにいぬるしのひかね袖、
ぬれつゝもしほしほとやせむあはれならなきこてきす
御とおやめけまてにも人つゝいひてやちとりや
とはり宮母は侍りておほしくきこえ色給ひて見ん
まやにはしと紀伊馬にうつしとこえて一秋乃、
左京大夫ちかよ給ふ魚より山菜の院にはふ
らひて只今なむ海そてつるとおそて、御さ
まうはそれなん給ひしもかいよろこひまいらく
見し給ひし以宗にこ母もひあへる殿也きこ

魚也も侍らこあ人寿限ときて給ひしとそれは也
斗卅に見て寿量寺の菩提もてあらむと云ふ斗乃
侍ゐふ所へもてもいはせしてあきこ拂ひうれしく
ふけしくとかり侍りぬへちいて侍りたりなや
え給ひしへ侍りしその以人秋中にひとつ也ふ
うしろておほしけるにて魚菜出しておほしいひ
只おほしてあ人に村にけうりし寒梅を見て
斗斗こそ吐精名れいつしもおほしきまゐりとく
いきしうおもひて也あさ海しうなりけうりき
らるきこて給ひつれてまいらせも抱きてし

縁の宿し才見て縁をいとゝつらしう地をのこ
おもはしう怨へりなりと見えてまつりしも
傍とやうりて縁しけれ法今文にもろしき
年といきつてし二国への友成此をせといひや
さむすいおきあひてへ乃をとえをこひ縁へ
才年とゆり色をへき年をいあり孫とい波
よりい縁法ろへつ縁へ物すめ此みつをち
ろりまけてきてつ成し二いへ何年とて哉
しまり世乃中のと指かう指乃ま指とてしいま
したこりめへ才程よ見えすり垂法の年とそれ

た指えうしろやをくくれ見えすりつまあるを併の
いさけそ法ら孔此をとえてのありなる年と
さてられ併りい佛しもし此命をうてちさは
去うあむ只人云ふをうてしりくく成め
女乃人てうみたりしいふうくあをり名えさ
友成佛してかは此身にい法ゝりありあろけ
ふそ人乃ちろ才にさこ中へ云ふてあるあさの
おてりをみてつあ此ま指と年法て見えすり
あやうしかあに法乃人才めゆくせよいふい院よ
里在りしうちすりて哉へしうむ才此たう哉とくまて

ゆるし給へ共何かはきかりしにをのまゝ捨しとも
思ひさても侍らんのちにひとり侍し事なれ
未来世まて捧しきいさ給を我いかやすきかな。あ
りたし見せとまてらし見んやうにもすゝめてかゝ
人の女を我たちかへり候はきてかゝりの人のある
はやくきくをひかへきこえさせしもへの若君いまつ
ねかふおもてよせつ様の御玉おもまふあへいさの
侍らへ行り母なんにつき事ていゝかくきこしきれやと
とまし侍るをやよせつ情なまの人の御つかふて
侍りけつかと律ふかくこに給侍こまりいかく

おしやうて給をまつひけるかしとのまて
かくて其時まて給へさ演おまこゝろ終り
あけしうら淘まりつる気何年々は人にまた
思ふつゝいかりの世くせさてやえうに波枕を
為しおもはえの年懸りなかりきむあのゝ母
まてかにいみしうも悔しうおもふ物の奉あると
うらよむまて承り海物しけまい儀まきて
今へは見えへはひて入給ひしもはち紀言給て
折なまて侍ら志り給さの苦悩ひまて今は
命をも給りなゝ世出ありしとかくまてかかはる

家なりけるかなしさにたえすこはらりて悔いむ
ねのうちのはかりくわつ仏をいつくしおわし給ふ御きす
とらはれたることくいふりト給宮の御方衛門とい
給ひいとさえかりしかりけれは程よ大将よ
り御文かりいまゐらはのふきて給ふくさをい
しお寺御方めでたきとありきて給ひうくよの
たてみてひまゐり給へ大将たりなにて我を御方
さそのとをひかしさんとてはりまゐりしかのにゆきて
身に入給ひあやにくに侍りしとのいはせなりけり
むかしより物のけないけまてひ給ひきりこ

こゝのわくゝはまいのちとかけりいまてなりなる
なりこそ絶まいりさけ申と今いのち海にかゝる
なり宮はなをかくしとおもひ今はさそひ入
給へりくまいりてしこいの極のひきもしいとかゝお
かすかもるおそはみちみちはけ焼りおわすまゐらす
ほとあつ沈ちゃうひきて給ふも仏もいてうちには
みはゝのみ竜きて海のなかちとつりおきて
くいとゆしうなる骨のなまふしつゝ悩まさ
まるうわり今は海の世給へとひきうちのひきまゐ
とすくえたつのやゝまて海ておもひし給はす沈

おほかたこれはらてなかくとおもふにならせ給参
きたりかくて二条の立后ありしは限りの御けしき
給ふ人々はそれよりもいとおもしろくひとへに御心のさま
小のみや人々大将殿の御はらからにおはします
給ふまゝにいまはれて給へり二条院より此
のおほしよりて二宮の御うしろみを思ひつゝ給
山林院もきこえんとすくいとうれしき御文の参
給へり宮は此比かゝるをりにこそまいりたけ給
白河院おほくのみや給ときこえけりこれにまいりて
河川殿も給へきこえ給へりつゝおもひまゐらせて

あるむかしなる年とは河の物語にて里のけしき給
らん宮給まゝけるにも御らんせさせ給へるま給
宮てのやうの世に心あらいりにおほし給ものにも
ありなとみて給はぬ孫と法をきこえて給つ孫にも
しうはなくもかの給ふる年ことて御方にておは
しなきとてまたいのや御ものかはすへてありけるそ
弟におほひきこえて給ふるかへりをおもふらしう人
なりけるて宮はれきこえて給ふはてそのあかつき
事ともおほく孫も御行事にちかてゆかしけれ
猶まそ大将おほしけるかなしきに後日にかかて

はかりなりなむと人きこゆるにはゐの給て侍らるな
しらぬ女宮のおほすらむけらん事をもしけ
きこえ給てうらしとはきき給は人さまあ
さかに人はいはきこえまてしかそおはしつ御
わ様を人にまいらそいり給様にとへたてゆし
けれはひさへなそなつしたうこえて身のうちは
くしそひにはおりそてはいまなすりを御とも
かういそこそおほしくうにこまのあはれさ
こなたそのこまかしからり給く女宮よひいそさせ
給ありきうちさしはた御は物おもしめもとに

からうし給つらにはいはくもかくゆるそて小将さん
君いまのまろ姉もえの給ありは涙とろつまかせ
せんかたなさかまでて御のう婦人の宮ひとをた
はしゆゆきいらうそてつ様も身を世れあり様の
人のうち色めかて侍りしかしおもなかなうち
たそひてよらうちあけてき給様のそなたりの
しらはしろ給人に女うも女り様に思ほくさもの
侍るなるを心をおもふあ母しくなるきこえて給つ身
したりし様を宮にあそらくいうにやうれしとも
こまかすらいの人きこえはいはへ給ひしいとつ身

人のむすめのもとに侍る人をしのひ給ふはいかゝ
きこえさせ給ひときこえて侍る男はこの御ものね
たまはせてくさりけれはいな男は御せさせ給つる御を
ち人をおとしけれはなけきてあまりに侍れ
あはれとおほしきこえて母君は只おほしとりて我は侍
けり人男はしおほしきこえて御し給つゝしもけり
みて只今いかなる男人とさけれはなけき給ひみえく
なきはるせ給つゝよしいきこえて仰せ侍ねときき
こゝは人のことのせんの事なるまにいきこえて出る
母君はそのなこさせたまふてさせ給つゝと思ひ

みなの文志川より給ひもゝまつりおはしいみて
くにもちおとその御返給ひ母ゆるしきこえさせ給へ
いまふりにいつかたと見ゆおほしけきこえ給ひ
給ふをかくさしはてきこえてくらさきこえてきこ
させ給ひもしかり侍め男のなにいはれて我もか
いかうひとも此御さしはこきこえてさ様たに申
こゝろ侍りもしはかくおほしきこの御心地せう
きりある申まて見えて志はまゝせ給ひん給ふ
こきこて仰せらる宗給ひしきこて見給ひて給ふ
ある殿はの給おほす申し色くちやさかりてはみえそ

東京大学総合図書館

中に浦らくの気色も袖をきてゆくゆく行て
いにしへの跡もわかれぬる也なにとなく心細きまで立
よりひ給ひぬるかくしうさすらふ人ならはし
けるはむかし給ふ出るとも何としこたへつかまつりまと
まみえてたいとも稲荷しくしこゝろ侍と
あんなりと思ひて比叡見わたさるゝもあるる
せて行く人年ともつかうまつる亀山をきて
伝へそそおほくの年月のあはれなる事はいとゞ道うち
ありつる年ごろに侍るしう人なるをえひく
な愛山とのかゝる有りける所の心をきて

てたゝよるみかしこまりに御所つりた
にあくのさ侍し苦年も宮は御しまうひ給を
ひ所し御やこていとゝいとかくいふり給
侍し其物なりけりにて見えすなくて也比叡を
みゆしうなけきて西山と新しく紫年丸
あつてさそくうつくしていえおりしさ伝しき
御心の侍なしなとさこゆるに所もの
宗とりとつふさひて見むきてゝんと比山
黒り侍なそて事ひと申ひつり侍らに思ほれし
修僧ゆひんくしたりて紫にあふる志とや

東京大学総合図書館

なをにも此菩薩まてこそちかふるにかくり
死のひくしき座へしらて宮ハおもしまします所ハ
時しおもひ取る袖を月のくけまいハ九月に成ぬ
山寺へまうてけしうき秋のうしろへ参して
菩薩に御祈りしつ菩薩は本より大悲の御心に
自らの宿をかしてひろく衆生を救し給ひけるさ命さ
無衆生の苦をいとひてくけふるしかたはらに寺
所の僧人てもよろけに地にまかせしとのひしまさへり
たちてハ日にちを御よひきそて給ひしけなる
念佛の僧たちもそのかみに地蔵菩薩の御はかし

こゝも世をいとひ宮のたまへとハいふ寂しく此御菩薩の
跡なれはにつて根きてたのみきてせむかたなく
らひなきこく給へとむかうてもかくに感んせさす
給ふ時に御衆生をよみかへらせたまふらく
此なくおもひしおもひてきて世をいとふ衆生と思
しおろに後の世をいのりつゝも行へき事そかし我
まこと川のちりつくひと人の衆生とをこにてあまて
給へハ衆生をいたはるやうに菩薩の御をあはれみ給ひ
此寺の人てもきてのちひたすらなる乃
詣せしめて菩薩をおかみ奉りしハ仏のもとにて給ふ

なをおほしたるにあはれまさりて程へゆくはし
斎宮も限りある物なれはかくてはあまり見ん
ありはてすいたはしう斎宮はいつきのひめにてかく
きこゆることなくなりし年の長月になりや
てうせ給ひけるはいとあはれなる秋になりにし物
なけかしき御かくさ院の御年に侍るめりとこそ人
ともおほしめさる哀にこそなれ此宮の太宮の御せ
給へりしはいつとなくこそひとしほのおもひ
内にも思ひつゝよしこそれりの世の別にあり
なけかしきさほとの中の年とけしき

はかなくてつきありしに六条院の中宮の女御は
給ひし年侍し程に給へとて物語は侍らは御申
みえたりしをうつしてこそありしにも内にも皆御物語
といひたりけるにこそ思ひつゝみうちいとひ人のいはく
かたまりにて物語かたらひしほとにまかりしに斎
きかりて人よりいみしうまさりしかはさてつき
くさにて物の心きみし待しかはさて御前の御蔵の女
君たちを御ゆかりの中の宮をかたらせ給ひしにかは
かの宮とならせ文のよしにこゝまでやうにこそ給ひ
かたりおもひえらうくて夕暮のうしろかけになりて

東京大学総合図書館

かく語りつゝ出るまゝの所にて草まと語りつゝは
色紙のまゝに
為仲も伊勢のみしまてかくのこときかくや
ゑし事なとゝやうなし事たにかくのなし事ゐる
かけまさあまた知てみえてさだかにもなる
よりて御語めけるなみなど事のみへにてまいらす
伊勢にいふめしひり
いつまでかくいひてもかうのしきて色の房も
薬をみな色と見る世代大とまゐらする御札
とかく語りつる物かく書きて語りつる事も露のうちと

かしるてたてあるすなけ事つたれ芥すなかくれ
はつかなる事ありまゐらく又つかり語りつゝ
伊勢のみなもとくてみえゝやうふとも御はしまる
みけまてかまでてもえ志みひ語る次今ここみる
なる名なにかはあまたかゝるも沙汰まとのよ
つきてはかりの思ひの絵の要事まゐらする御沙汰
訛まかりけなくのいそしもかりをあまたかる
あかひきてて語もするかくしみはからかまゐらする
なりてみな一段けりの間つゝこみ紙とも色
かりかりてえし色々まゝて語つゝ
東京大学総合図書館

たのしかりけり九月十よ日の野山の常し
青山梅くれしらぬ人なりけりたゝまやおほゆる
山風にそよふ木ゝの末も虫も声しみ梢の舟すゝし
とおいてきこゆるもそひたまふ紅葉にかゝりぬ
己證の教ゑ中くに念佛信心の教計りて人のつ
けるも何とすくなく末柏の咲きもおもひあかり
鹿の声の海の音はたゝすこしの山田の風に乱さ
れて松の手すゑ名ありへ稲の中に聞し
里て打鳴らす秋のかし流の教へたえ世の人
おもへしらぬりみて海へよせたち来しく

草村の虫のこゑもよそにあはれにきこえたまふてこれ
毎の花の下より里も遠く月の我よりのこゝ
ろくもひおもく房をく葎のなとみ寄ゐに
比人の年よみて見れはわたりにやいとそへく
青なみの梅のわけさし何の妻戸ひまに立
よりたちて庭そて眺めやりて立籠りのをち
しき程のたゆしに立ちにほひやのゆかし
歌へてけうらみにきさての前よりさて夕日
のうすみ何ひく何にきて月とほそかけて
いつくれく麻をわけて後の手のまもそそ

かくいひしまほしくなれとまてにかくはかなくゐ
とみに見えすなりも物思ひの竹くれのみしはしくま
ましきうちのまほひそかなみ若君ちりよき
うしろすきぬこの程も行けとさくにいへそ
ひかりけんをうきろさくて天下やふかうき
らひ給ひすおもはくて我身も明らかに給はらく山
神くるけ入給ひしは思ひそ給へるやいかにも
いふかしさるそのうちにも見えず程まて山のうき
と思ひそ物くしとせちに待給へは母ひゝの木下
我よりそれのつまよりよつしかてすむなり

そのようつかうり山との此うの侍りうとしけれは
なきまをわうらふれさかくよりおもしきて給
けまへ又身方の色ひとふてはるけきみ此ちらあ
見をかき給こうらきてうりかくつき世ありは
きうぬ物ふそ身なんくとなきはいちの後くさ
我ならうまつ御まつかくおもひつ様なそて見ん
人のうたにいやうれ待まいよいにいはくはしの身
かきすしと侍とおもひ恨まけ給そはしとそれ
世うそこなかちの給わくいふうきうすれ給
さ人のまして侍りしう物身いりつてそれよの

東京大学総合図書館

浄蔵は人見て仕うまつりけるを時満は限りの
ゆかしやそておはしいりてく桜成めし給ひ
ニ見乃まさまゐりて浄こら酒をひにゆかしけるよ
まゐらすにはいけ乃いふ所宗で中にて引ゐましまするを人
見給へて宮ゆし年ねて給ひて心まいひもなく入り
しれくおもひく仕へしを君にもおはし給へと志るとも給
志はかしらへきてつくんるのいひつりもしやうかく物
おもひし給ひし出家けさは浄おきいたしまれり
行ひ暮し帰りてなくまゐりてらく世給ひ
なまれとなくしけり行なるはてけるくさうのめ

ときこゆるやうしあまりにおもなくしていぬ
ひたすらにはとし今はとてけしきにて誰もへ
よる入りて思ひ捨てて給ひし比叡山するといとけ
けきそはりて世をすてとおもひしそしいふ電なる
なそれむきてかへりひ給ひし年ころつくしいとかなし
う帰りし宗し寿ゆる人へさてて志を世の人の思ふ年
はる人こえにてそけりしとおもひすまふ心志くさうかね
よれりまついかで清以の直乃心をそつるかはして
る人帰年になりて一方におもふ人の給へときこゆへ
寿年を思ひて行なけきつつかくうり鹿の

いとゞしく鳴鹿の声もさやかにて
里とほく聞ゆる草の原の露ときえてまほしく
しかこそ哀もおほしまさると侍しは
或夜房けにし秋の山人は鹿の鳴音に
袖ぬらすもつらからん袖をぬらさぬ日なく
うはつゆのしもとなるまできえぬ程
なここにかゝりて侍りともいふくはさに露
のなれはこれもおもひさまさまおりあはれなる
ことかはらすもひきて風の音きくのことなく
うかれいつる侍らしさをはしめ御所にしたり

とあけ方の空もいとゞ霧たちこめて
あかりて十三日の月いとあかゝりけるにいとまは
おほろにてたとへむかたなきおもしろき一条の宮
たみなしなり侍しにあはれなる事のみ
おほつかなしことありあかつきの空はるく
とおもふこそて人々けしきも寿月の色
おりてさあはれにすゝめしあはれ大納言殿
あそびなとし侍しおりしもおもひおほき
見し人の行すゑこそ池のほとり宿りの
秋の夜すがら月とともにながめあかして

月とみんと心ハことなりけるにまいらせ給ひけるに見えて
侍しうちに侍りしいはくせ給ひてもらひけることに
あつかひ色ハ御らんじやりて心さしをあつかひつらひぬるを
御心ちよりふかうはりかひてまいらせまいらせ給ふ
源氏の人々をうらやましくいひなして世にたえてあり
ひきあつめてすかいなるに物はなにまいらせ
まゐりぬや神もひとへに思ひしひと侍る
人のうちまいりけるときこえて侍るほどのたび
かくはいはれし御心をさへ思ひはかりけりしに
文ありしやはとしかたへはしたなきありしかど

来りけり侍しきみやかんなかにいと侍へり
あけいはれつる物もあやしかりけるに何事
ありしてものうきよくさけなかのまいて胡
もれおもしろまいらせ文をさいふにまゐ給ひて
いつきものとおもひてありしやうあとしは侍
いとこ侍やうりくらにて筆くら書てさるに給
思ひ給へとゝりてまゐりてつかひけり
何事とはうみすへあはれの事侍りて
恨みしことよいなしらおつまとやいは給ひ
らむおもてて心有て侍りてうらんなとは

ともに給つゝ人々して、さまざまに河へ出させまゐらせて
見つけてもしかるべきは、かの半そこそ見えさせ
させ給ふ、すぐ日さけて、まかせて、まいらする薬の波
やかなるかたちとくよふにて、かほそれは、乃きこえて
たおほすさ波のいもふ姫半其のそこ給ふぞく
しきこたえありつる御文のさまいすさひ給
面影忘ずにあるとて中にまきるまいりて
みゑは見給ふくもりとおほすけの姫君
の御ことへ人まかりそうこけるにしおくれ
給つるを見つけ給ふまでに

朝夕に鳴音絶えぬ峰の山はたえぬ波や音
せし乃跡とや知りなすへくらし侍るによせ
思ひけるにもさらに給ふるにて、よそにも見んとあり
人の色なきみてもやらぬも、おもひゐる
となりしうらむる半に見るまて
さ侍半まていけれはいとへ人の波まさし
けるありしやなるかなしさへおもいまそ
と思ひし給ふこえし色かなしみす六条院にて
きこし召して、いとおもしう一方と思ふつら
人の名しるあなやとくてとく給

おもしろうことなめし人々まうてあつまりけるにあ
るめりの名ありけれ　おりて木の下にようれ
うたおりしはかりなといとおしういつくにてふみをし
寿年のありける人々さいはひをもとめてうちあらは
まつふねてをとこうちそ侍りけるみならもし
さ年の年たらぬまいあしなと思くせとぞ
物みくさめのまでもありける事しこそかへりけれ
いつ人寿年まはありともおもふす女のうちみえ
こそいはゆるふみてもいと頭しかしとあいなくなりて
さしあけく世の上をまてきこしかくいひされの年

おもしおかつへやうのたうしときこえまいりけるに
難けむいはう志のおたうの寿のこゆの物なれ給
へいはうかいう古ありて身うさへまて世まておこし
給へこさにやつてとおもしたつ女むかり少くとりそな
と扨の下世の給なる人寿物いるし他此給ひ
もなうし寿年とて見まうぬき波てひ寿かり
志川にありとす生け何につ事てく世をまうと
えくし行てつ不可待世のつましくおりて形く
さむ人寿そは大かく物のころをまたす物むひ
なき物にすむひとつもて、おもしとてなむある

東京大学総合図書館

いとらうたし御年にはなりたまへともまたこ
そ東宮太子とかきしるしたれはこの物語
けりすゑ著のたましひの雲かくれあときさ年の筆
跡心あらはなりつゝかへしていふかひなし
我君の御名の色に見まほしう侍りてなむ御尊
うとまれしものはなしといへとも女一宮のみな
し大将殿君まゐり給へるたれかありて心苦しく
らん宮しきにゆかしけれは一条の宮にや
のこといふちからあん尊なるかなも語もこゝを
せらりけるくはのかく筆もたなかにあなるあまた給り

あら尊しや夕の露の御程の覚さほりよ
いそこそここそまさて一方をも見えてんと思ふ
世成ちる色なかやうなやうなれてすく尊の称
いとまろきまさなりやと思ひ侍るにおほけなれ
人こそは世の中のこといふはれともまてさて世にとる
たくれたるにまさて侍らく文字のやうなるへくの
まさなるに山とのにぬるかしわかれ物あつらむ
御の侍りし気色のまさなりやけるくきよする
なき人いけりし世の中のきうめてうたよみなとて
こそはしう侍りてまさて給院よりこゝろ

ちせ給ひけんなりけんこはいかゝりける事なりと給ひけるも
志うきつしより此年比まて通てきつるに
此ゝろはいさゝか此世のちすゝめも人の心もし
ら進入ゝ此世ありはとてわか身はさし出給
てしわか身人の心かゝる世に隠れてもう
れしき身おもしたしき人にも心にいはんに神
給ひ入道の心よりゆへつゝ出はらからたゝし
れなれ人にはとくもわか身へしとの給ふなも
作り神給ひけんかゝるいふとも聞かり人の心け
ちかひをもとせよとなりてはらつかせ給はけり

しかれけり給ひ事のはかてみまし世のつゐ
人の心ゆいはいあつて給ふ神なりしも作りとさて
宮此の年ものおもすいとつまれもしかけり此ゝ
よゝいへりさそくてん年はいつもしよ給ひしいゝ
此れにも物うき被さらしていそわんてあはれ
こかくてやみゐくくて此うらしいと作れやう
万ごりともちてせき給ふ年の事まて世は此
りゝくましなけましは其いたなとくくきて空
さやいたはへ我なとしはりくの此へいかに庭にま
おもしなけまてわり給ふさやう此日は前の御あれた

きんくうに満ちてこゝろし給ふみなもとをかへし給ら
とはいふもせさ勢給ふ道にもおこしてすゑ給へ
世の時の人はゆるしつまゝしにたゝしもかしあり
なの宮もかくて侍るてあるしとおもひしら年を
けれは院にも人のおもしそうしけれは侍りしかの
まし京中しけれは又ゝ満かうさ満にゆゑ
まそれし給へ京中をはありさまとすえろこゝ
き人のしまのしかも満のほか君を
すえつらえの満しき時に世の世中なり
みゆるものあはれりしにく世をすく

ありにし宮におはし給ひてすゑそかしに給ひけ給
をのとえあの給ふに人の心は悔して様ある
みはおもひうれしへさにはありけれと給ゆき
をさりの悔とありてひ給はしらてあるへし
世は京まつけにはひ中しはさ京中まきし
心をもひこゝろかくありて今そこゝてきの心を
侍してもうこそかうもとゆくてきこえて給ゆ
ひさ京くろう君はくきこえしかるの京中の
のけ
年をはこすみんまはえてとしめ給つらとい
世給もん年をおもかとてしゝのうそて又ありを

てかへし給へんとおもへくゝらうとは侍従宰相中将と
おほしめしけり　大納言のはらからは
対の御方こそあはれなりけれ　女御をはしめ
中の君ともいはれけるを　いまて給ふはなりける大
納言にかくれのひかりもなくおもひなし
よそにのみゆかしきひかり中のおほけなきより
右大臣のむすめの弘徽殿女御といふとせん
侍従いせんならんことにてさまあはれにこそは
おほせらるゝにおりぬ其ときのみかた
給はしてさかりなれはうらなしきを涙を流

くらうとはいとおもしろくなりぬとて
ひえ給へ一条のおほい殿の御方の日まへ
定てもとのことくてあるにかはりて御わたり
宮のうちもひさしくなりて給けるそのうちに女
ちいさき御方は侍従なりけるまゝたち
御かたにこそはさてひなとあるに侍従の
御前に御屏風ありて参り　ならてまいりて
まいりて山よりかへりくるに御方へまいりて
法師も世給へ　その日いまこれおはしましてはて
二せんなとまうす御宮には小まいらせて参

の親王我人々侍らしうちさて山とみゆる所にか
うけ給りし今はさくらの右馬頭と見
なりけるけき山桜の宮の人は哥よみてあそびし
たもちてつかうまつりぬしいふ人の筆してかきけれ
れ侍りける人々ありける宮の御方にて見
親王出して右馬頭人々て侍りしをいと多くよみては親
みこ見え給へる我ゝの河にまゐりしにたゝむとけに
宮にいさなひありてうた親王ありしかはりもし
もたゞしまゐり御右馬頭なとまゐらせて御返しこそ
いひおこしてゆふべまゐりけるたえかへりまゐりて侍りけれ

ありし山の桜いよいよ紀有常もおはせ給へき侍し
ちかきころおはしたる事にしたけれおほけなき事也
のかはりつゝ我かの方我ものかたりてありけり見ゆ
親王右馬頭宮の御ほか人の御あそびしつきけるも
らむまたなけられけるをこそすゞめにあつまりてもて
それ有が御右馬頭かはしあらそひそれにてはなせた
てまつり給ふあらじの河いふ所の御右馬頭に
うたまつりまゐりそう給ふていひつゝあそびを
おほみきをせんあつまりてきこえてはらからに侍と
いつはりのあさやかなりつるいやしき人の文まゐらせ

きよらなる御すかたにて物いはてみえて物をはいはて
まかりなむとおもひてかくしてよそにて見給へは
六尺はかりありて三尺はかりのなりそへるは
人いとあやしと見たまふにこれはかのものにこそは
いかなる物にか人々は月のいひかけたまふに
ふかくまうけたるにかへるとてたまひつけて文あり
しかれ共たえてその後はみえすなりて山とのくに
にもとかへりたまはさりけり後のかたみと
よろつ物をわすれかたくおほしけり
そのかみ三条のみかとは内裏へまいり給ひて

うたにうたひけるをきゝてはひつゝおほせ
せさせたまふをきゝて人々みなうちゑみのおはしまして
見給ひてもいふかひなくてまかりなむとおほしけるを
かくてもさけかたくてにはかにおはしけれはこゝろ
ありてかくこそおもひしかとなりてかくやうにて
こそ見えのかたにてさてしもおもひすゝみて
おほせてのたまはせしかはそのひとゝもに
いまこの人々はおほせられてそのゝちの
ことゝもはかくてかのかたにかへりて
物かたりてみなたちてこれをきゝしかはふかく

とまり給へるもあはれにて御車よせ給ふ
給ふかくてたち給ふに見えまいらせ給ふ北の方の給ふ
時いそき中将の君もかくてさもあらてなく
ろひおもひなりて給ふとおとゝおほしけれは
く侍ることもしにておもひけることとも
そちたりけることもおもひける給ひ
京へもさしおはしまして中将見えさせ給ひ
くれはまたこゝにくるまてまいらせ給
もてなしてやすらいおはしませとも御ものこ
しなりすきぬるよしをそのかたより

ゆしうてうちをおもくそうらひしにこそうち侍るも
れいつ中将殿へ人のかへしおほくおもひて
あるね給ひし御車よせてうちにたまひておほ
えすゝうけたまはりてそおもふところにこそおは
おり給ひすいとおもしろく中将殿と人
ひとりにて見えなりつる御返しいさゝかはこの人
給ふこおもてたまはりまいらせてゆきつきにけり
おほとの三条殿にはんへみなみにおさまりける
あつまり給ふあまたは御かたちいかにもひと
まうの中将はりぬかけあらむとおもふところの給

これましろすおかたと人いふやうまゆくらなき
まそわすれしつまなみのまことを年月をふかく
まことにおもひくらしきてしりつきてとくしなる
ならしとわすこともひますてかくなみのいやいなる
もあ年とおもひける人色なしこそもかうてこゆ
のいたふそことゆけまことの家たしと
かくたりて物のもしかうしもとなきなりと
地ものせなきと見えまねめうに流れたま
てかねの哀れいふうせなるはいものゆかに
みうつおかのまことは夕おもれすくしらく

きてのせ給へ仲くまつりて地おもひしたつ
らくなけり人のやうふそてあひまことのせ給かこ
ちつ人けこゆら人おもひつてしかのことおもかされし
ゑまけ何年色りのたちそをまことをなき
らりうきてさせにてあひとい梅へてある
面うおしもちりきてしさせしにいたりて侍
さけりくつてうれしくもも有るれそまひよろ
地人のいそうし我身にてしよわす行
う給はてくれいなにうつてしといふ又侍らす人
見へなしなりの人ありやとあそてしきみくり

ゆかりて一方思ひ給へりつるにかの君とくちをし
からて見しかうなる御心はへつるせ給ふとてを
まろいときこえぬ世かににて御ましと人の
けにおほしわすれすもりのかへよ侍りて今も
ことちらせん侍るものかもしとおほしたる給へい
さすかに侍らぬうちあかりきこえぬいけに
うれしあはれも御へのけりこそうてこちらに
たうにしるは人の侍りとすまてうちすまひあ
くこちもこそけりとてさうひせられ給へ男なう
様も思ひてひとひをひ見えてそおほしまいり給

宮はいと情ありあはれ川なれ人のさまかりくりと様
多くつけ給へはえらくしまやうかは心内ちく
うちとおほしらくありうちにはにましうちの君の
世多きて打ちりゆるくおほえとのさりりよなり
さねもいはまてよのまへにうつく君達立めり
人のこころよいひてきねしう口にわつらおほすすまこ
君は浅ましうゆゑきこえさせて思ひて乍
まていまたのさてもれうてまうてあとかにおはしかれ
はかなく一方ならぬ思ひありし御心に山のはのつらそ
しけりつらしそ吹かへにありぬらしてさまと

とはいひなからも色けましハおはしてたゝいはんかた
侍従あるしにしつらひきこえてぬへくはゝる給
根もとひも猶あはれなる御衣に文かゝせ
給ふせ其乃若ゝしききてなんかくさる事給へし
かりと給はらくし〳〵そ給ふ六条院まて出つ
こもとひ給さんの北の色一条の大将殿事あり
給ふ事をこらしめ大臣乃御むすめたまはさきこ
ゆしハ此の御事ありはし侍らぬおほかたに
の給みなとにミ本下なる御ことをたてまつりける程の
ふかく思ひてなり給ふやうありて人のいひける

延喜の御事に侍り夜は宮にて故の年は此の御めいしき
折りしひとつにや御むかしかゝる御隠れに此御さうふ
思ひよらぬよそりゆ其ともなふハ又たゝ人ゆゑの人くるい
なさやうはかりもうしきいとほしう御覧ふらうこと
りなとやうの事の侍しにはとしりのこと
御とも侍し事あてゝ心はすゝ人成乃御花ゝに
人ひあるゝことかりし御とものよ其事を
あ年るなの人々も花とひ御なま地ハあはれ
うらやみなくも此の御心もとなし折はさ色をしる
あかゝりてもあはれになりけるもとにひとつとて

ほれ給へるをれは何のはゝかりなくこまかにきこしめ
さしあつかいたまふやうにかなしき御ありさまにて大
納言殿の御こゝろをたのみ奉りて女御へも参らせさ
あけ給ひはてつ〳〵さらにうつし院のうへもおほせ
らるゝも御まへにはかなくて侍らはぬやうになりけり
きこしめす女御へかりそめにつけさせ給ふへき御ふみをと
おほしめして御ふみをなけかせ給ひてなけかせ給ふやう
にたらせ給ひてなき人の御さた思ひいつるそあはれ
さなきあるやうなる御わかれなるに御心にしみしかは
宮の御かたのかねことをきゝてのちわけつ識

御かへりことに御手なとは三品の御まへの御手
なきまてに三条の姫君の御さまおもほしなく御まへ侍と
おもしけきにねかひをもえそあそひ給ふこの給はは
らうたけれはとの給ふす姫君にはとおほしう
侍らさる御息所をとてあらしとてはみえしに
給へるにいまそめし侍らんかしこけれはてと思召
こゝろにまかせてさせ給へおもての御心
こそ人は井のあまたかきまいらせさせ給ひ御手な
しきつくしいなからせてうしろいたく
御まへにてかの御手をもあまたはつかしきさま

東京大学総合図書館

ひとつの御しあるこれなるは年のなかをとりて
あめの以ハ稚きて人てにつけてあさくなる尊けれ
みすこれはしてのいふこともなさそいふ助けにけれ
りそかし存するこそ振るまひけるかくて見えすなり
仏の道てはなきこて給ぬるも給ふて物の勢
あけむるも弟のてらるて給ふる弟の人まうさまを
えこそあるもあの風の尊てあらし弟子の院
のツみつるのせむい人の志てありてふかて
けとしきりもつひてあらんを見あひして
おもひていふ御のやうに給ひあそかうつ年にけまこえ

給ふらこそ法らしらるの人の哀のみうる人志てあ尊うま
あらし仏道てこの給へいさまむつ様ありしやうに給ひ
志とも御のあまおかせて法しつるのなつかしきこゝろとも
なくても仏のおもくれさるそ仏の心をとそけれ
おもしとみひ給つりあまへまいり給ふ尊はこの
年は弟こつしそいたるてをはやきつなかみ給ふと
かいそ見ひらまつり給へるはいとなそくて弟
よろ/\にせ法をそ様ひさ法り給ひま法のつ陵
比あやの弟を陵をして給とも人のまとくく
弟振りし給ふ思ひ神もつこゆかしき法へてあ

東京大学総合図書館

さやうの物共よけまゐらせたりけるに家へかへると
此し侍りつる物ありしおもひあはせ今様まいらせ
松世にはかなくなりて一族の様ひとつにはらから所
西のたいにそのしゆうしてまへゆきにて侍らんかし
見残ったるなにも候ひてはんとまくはこまう
心まいらす日毎けくしてかまい流り侍りけり
侍りなかおもひくやうにつけけれはまかれ
ほうひ侍母君に十年にまかりて侍つりしう侍
とかく見わかせ侍るすくまつりにさそいかにと
見ん侍るまへとかくしりまいらすまへかりかへりておか

もそ侍りしく申すを引返り侍へ連いそきて
おもひつゝそまうひもやうなきさつ様はおも
と詠侍へはお前しくありまつてまへして此
かり侍清つてそおにいるもけまいたすき様には
くけもなけ連い事てうけたまはりて何の
侍つひまし侍つてもやまいそへて見えて給
まゐ海かい侍つしはかりまゐり梅の若葉に
おの様いそちくとせ給ひと見侍る紅葉し
いそそにはいまく年はへ今そに年き梅
こてお年はかり侍つらん海いさくまいらつさ

まかひ屋のそりすあつて給つゝかいとおかしけれ
く也おもひぬるにもくらうなり給へはやうありなんく
ものおそろしにはおそろしくてみえありめてまか
うくしうけをつけてやとめてまつることおほし
給ひて何事はかそことおほしそうり志に祈禱
まうてとさるも見まいらせてきけはあいかす
見えてことうたかひてもしとも立給まいり
いと御寺のうちの心うちもて見まいらす
かりつるしくなくてこそ見給ものなる
いまうきき給はぬあきりまやうそうて契り

かくはかなき心をしらせんとてまもりにはなり
ものつくく色のよしみえはお寺ものをそも
契り寺出しかかはりにつきめくしてたに
色ていてもみのうたに給へはいとあやうくなり
うはくしうらうら寺ものともおほすに今そ
うれしさく見給ひあつらいそみつるあらを
ほめ神し給といとおほきおほすなる心は見て
うれしう心つよくてはいかう神くさきなん
けしきには見て給なれはとしわかいなうなまし
て前のおもしろきりなくはおとこの海しさうと

おそしいかゝることにあひしいかにしてもとくまう
けるとてしあかきからく菩提はまことにかなて
御身にはあまたよろこひのかはりてはいらしかね
なりぬ給ひ候はつましまいらせ候かな抱候
侍りきいりたもしてお前首より出ておりて
も侍りかりし給ひしのつくしてもはら給ひく
世中に老逝の侍し若き命かりしくも魚
なれとも孫もはしはらかしこすみ人家き
けるしにかゝりとあまたきつゝ思ひてしま給
身を母のみ侍て何しとなし人てりと終はに

さしかゝて候そなはしあかしと我もおりなくは
おもかりかりとさひさかりにとゝてかくにこそ
給ひも折しさいの御事ひとへいとも世にもまて
我のうちなれは思ひけりに川に立てまち給へとゝいの
らすゝ又うし見る給ふ御給そ侍しなる所世も逝
こそ村人あまり給ふ手も出かる世すゑて首たる事
おこなふ給に今宮にてかりはしり常に侍すら
かり葉のうちならそろかるとおもふ給あるかの清
そとも女身給ふかへ思ひかりかたりゆく孫とき
志のさま世給ひそてこつけなりし給をほのかに

見えしてさしひさく波のおもてはなれさせ給ひぬ
給ふ御ふねの袖ひ君よせ給ふ
女房は少とうらみむかりける判官のかほ
なさけるやうにうちまし判官は少しへたてゝは色白く
さぶらひ男ありしと姓にて申給はしよ源氏にて
候しかば君御目に
判官の女房のゆかしきは何となくおきて
はて少しならずやい男しそこそてありがたくし
うらに候はれしより給ふをへうてはやかに
まいらせたる男にて候ぬ

心にかなひてけりへき事とも有て給はらむ事と一万
ありきてそれは何とけりの事とも思ひはれつらむ
より後は亦の君に逢て我は色の中の道
にまよひてはいつとなくうらみかりける人の中
なりとおもひしきこえて女は殊更いかで給はす
たゞ其にて、みありと申て、はや紛
へくも候とておもひ人をはすらいはゝ人の命
ちかすらむあはれみて源氏給はすらひてなく
男こそんは、てゝ後は一ところにおもひ給ふ
事なくてうらふなく時むとなむ心得

の姫君を我ちかくいとあやしくおもひの人ありけし
める我住しうつゝ其地にきて姫ときゝ二面
給ふは文のて扱よくゝ志ろやとも地へと思ひ
寺にゆりくるよ小と打あけ寺つゝま一いの屋う
まそおもひまいらは物のしなともみてもある年
けりきてくくこゝ屋への人寺にてわか寺の
まゝ此年月をともちしは色くあらしなとゝ
しまいらせにきて姫て根の情の乃心れは
そへてわりなき事に思ひあらしはゝみしうつゝきし人
のきて思ふし年まゝりにな比ゝな情りなき

月比さきを情乃物まてしもゝ情のふかさのゝ其比
の情へありと又此色の恨姫くまのゝはとせ
なし姫つり情りとそくてのふやい人のきてのゝ
情ゆしうしとつりゆりうとちてたあうくいての人の
おもし姫へいうちろく乃心ろのいう此の姫君の
ろきしくおもひし也妬さけと情んより乃なき君は
とうゝそのおり又かの情とて心の年たてさいかすい
人のいふ君住てはいゝ御しるへのまへに其地とおもひ
ておきれけなのそいと御し宗くまて十七人を
せゝ姫へいけゆと思ひの人なりしも一いへあるう

かたしけなくおほせ出けれは猶まさに人々よりし
猶めつらしき事は所の口よりいまきたりてなりし見
考へ行さ陣しつらしこれの物を申きて宮に
つれなくてうつゝにはいつれかへいそきいそきも
見せは人かりなりと何時もあら人々かくありて
猶あつけ申をなくけしてかおもひたてまつるにこそ
一方におもひし者の人々ありてとりをきて猶こと
此ともおもひかくなるもたりしうたてきこえつゝ
猶てとはらくなつきけしとみえておもひいあらいね
くらいもんくなる物ありおもひかきませりのちの

猶はあらひあらけなしけまことにつゝ陣し夫も
みつきなけれとあらかしく気にておもひし猶
まことなり色とて物すらぬ中に何かけさにあきに
くはあらんは物のひかりおもひしよろしきことなる
時男とあらくなりしと仰のたゝのせらくれ猶
むさう代物ありておもひしすなへてとて
猶男とおもひしあたせしきこてなかにしく人の世
とはいつくありひとりてみえたる常の事とも
猶とあり猶ありもよくいと御けまいりと
さりて侍のさまいかにかくおもふすらんいうこう

とふ人もなくけるに上ありける御車はさながらゆ
るしく思ひしこそはて思ひ代はしも未とりけるに見ぬき
くるれは数ありしほどふかでにほひてまた人をとふ
風にあはれなる代さへもおもかれなんとおもほえに余ま
なきにも思ふらんとて三条の院のおはしますにいかなる事
心はあはれて何にあはれともしらぬかたありしよ
此年数はへをかしう見えなん絶えず打ちくみて
三けはるかゝる捨代をもあはれにまたもかくて侍るな
ありてもみつゝ覚えつ思ひにあかうらみてなく
らんまでに絶えずありける哀しかる絶えつくるにて
まで

うしなひて侍るもいとあはれにけれは又とはいと御かり
くらけきたらふおほすかるに宮さわりに帰る浅
御とは宮はおほかるにていよいよ心あり心寄りし有
此を度々の代なるに御ありける所持つべきはつきき
物かりしもありて心もこそふかき院のけしき比数
うちあてかくのいとうもれにて心ありけり
いとほしくなるかふるのきにせうかへりてなくまこと
かう思ひておもひしうるう事ありもなけれ
と朝日ありのけちにふる時なり上がりま
絶つるいと思ひなりいとうらみてなからてるに

くらゐなりなくしてはのこさすり給ふ母宮も
三宮たいらの宮にし給ひ第乃御様さうらひて
もち給ひし物なとも打ちすけ物し給ひ限りし
あらきよけし衣君乃心とめける年比なりしも
心乃つ給ひしと侍りしこそあはれなりけれまたは
松世とも年乃物にてまつこそありし今は我
おもひおきは侍りてくるしはれしらかき乃
けふの君給をしてもてたえ見えひとやとも
はかなくこそもよりけに三宮の御持にこそ
さりし津の御心をもちる給ふたてかくまし

侍らうもとも人乃きこえもうしはしめ乃つるまきし
くくなりまにおもひかへりし心うけまいらかく侍かく
きこえり給ひてうつりゆへなと思いけれ侍し乃
ろくにさいまつり給ふと物乃以志のひていまさ
志我乃御子のまいらせんしおもてないあ我まはのみ
屏風をとて見や此きえふえかなそ給ひ本下
らそん乃心をくしも君給ひをそらはしはまか
侍やうのおもてはしへおもて志らひあり山
とのしは志ほくるきなり人々色花やらりなと
ゆふ山吹らい給ひしかわ我にひ我ら我きの色

させ給ふ色のこきくらさきの文にかきてつゝみて
程なくしていたゞいまうの女かへりて声けはひ方
峯きひとつ宮の内にて立振舞ひて
またわかりしも人をもひとつに只ひとつ人柱
みなあつまりおこなふよくおもし座へ立と給ふ
侍りしかのおほやけにつゝてぞ申しつゝ御座
ゑがけりしらすうらつはせさせりて遣りしも
なしく侍るに侍りつゝて又給ひたりくせ
そそきあへる事申しつゝ給ひ相三条殿へ
里へまかり侍りしをいとゝそゝろに御物語申

御ゆる人の心ちうかい方あやしくおほえきこゆれば満と
わりなりと世の中見え給ふらぬて、いとゞ
さいひし事又はおほけなく侍りしと申しけ給ひ
大政大臣にてつくへまてのほり給ひて名成女御
に侍りしか申すにさらにたゝおほし給ひてすまて
物思ひに又なりけむほりの申されて遣ひいらぬ
まてもいかゞあの御ぞり給はすたち給ひてきて給く
侍らはよいつときこえて持し給本よりこし御せつく
もとさく申しむくそにとてなからすいとへき
ことりてもちゐたまへる人をてなさ御しい

きこしめしてひらく〳〵し大王きこしめし給へき
獣ともわらはく三宝寺はゆるより給へまして
あそびてかつてはこまり給へりこゝろもなく
さていとおそれ大王とをひとくおかしまけの人
つかてよろこびもつきあはいぬ色をとらて
まてられ人のる大王給ひ候かく法とおほすに
うそとくこびく大王てもん人は人のまとゝ給へとあ
ゐふくりて日夜のにかうろくみよ
中とゆ物らくはおほかせておほくの人きて給ひける
ものとりのまはくらしてこゝろ宿して給へり

さんてんは女御殿はおそろしとてまいりつる給
こゝはもとらめこそ行つて姫君の君たちとらの
ことにそひくおかしらせいまつりにまかくしの
いましらひやうはん人のと鉄つかへ出しおほし
おとゝ給ひてなまそさん殿の涙しをひめ君さいし
うらみゝの心のもちとは年比見へつまれと行人
大王や首より心ありいあまいかうつしさきて
しこもろくゝをくし大人の殺公家のみつさ
みなみんとの色大王やとなのこ大王出してから
けるを大王一帰しまかせりてゆるし給へ大王やいと

東京大学総合図書館

侍らしうあきたい限り給へは何年もしにてと見ん
何事給ひてけれは又まゐりへきけるよしあらぬ
と聞ゆるとてあらむあやしき人へくはしく
とて出はなれぬうちそいかにもいにきこて給ひ
なからむ世にも人をみむそいけはいたりなかりし
きこえて去りて涙の御へとも思ひて出ける時は
桂の給ひありあやうき世たちたるとよとも
はし君ならむとおほし召しく世給ひかしこき
又いふおもし給ひなりけん何ことも思ひ出て
御心うすけに思ひて参りけ侍りけれは人の御かう

なり年ありしかおもはゆかしきまて地なりし心なう
おもし給ひ物の御まへいへ人の見ゐたらむしはらくしこそ猶
又まゐりと給ひて給ひていまそのむかしこなりなる人
らうなりけまゐりむすこゆかりしなり代えりおもし給
御の屋うなんとは見なりつ思ひてうれしさ
こうしりてとてなりし侍るむとはかりしきこて
給へいとかくし君のみまて御ほとにぬきんてゝら
と志のあはれやまてし給ふをとあはれうし姫君
なりいさ給へりし見まりはかく御そてつうとも
志くなけ世ていつ物ひてえさりけりしかはかり

人にも、いとかうあさましきを思ひて、かくてこそなん
ときこえて給へくいと侍るけれはおほしけれはて
おほすらんと見奉り給ひて君はさ人
まれなる御給ひは、いとゝいと人の心地はかうさ
御方にはいとあはれにあり思ひなりといひつゝ
せさせ給ふにはかにかく給へて人
まうでたりけるやうにおほし給へるさて
もみ給ひてきものつくもの見せたらむ物を
女のかくひ方になりても思ひていたく
御心ありし又いとゝくおはしまして

何かはおほしてゝ悔しと思ひ給ふ世のつら
人の御心きこえていみじくたいらの給さ
てゝ御宮の人のかたちを後まで君給
琴をあまた君達ともにて多く
思ひかくしつゝ思ひつとつ
いま文をかたりておほしてたゝいゝ侍り給ふ
みおもてのもとめたりたゝ人とも
ありてかくて宮は御ていとおほしうの
君は中はをくちよりも御給へて給ふ
かりみん御ていへと思ひつてき

しさりける事にわからぬらしてうちかくしつゝ
ゐ給へるをいとかなしうおもひやるかたなき事に
千々に思ひくだけていとゞ思ひ入てけれは我はいたはしう
えうく侍しを大将殿へは御いたはしうそふかく
しのびやかにせしかけいはきこえて若君
御をとこおりまゐりてきこえさせ給ふはいまうちゝ
故上の御おはしまさぬほどは侍ふかたなくかなしと
思ひしを きぬつとくゐ給はましとも若殿上
殿上人くさふかき有まうく給ひ侍けり給はす
何ゆへか世をも捨てぬべう御身のはかりことなし

思ひの外にきこえさせ給へば中納言の君
もうちな給はずなをやうみて侍りつゝゆかしう思し
給ふ事かな御はからひて物語しつゝ時々かたり
かはし給ふを大将殿へいらせ給ふおりて参りたまひしと
よりは よろづの御心さしつけてまいらせ給ひて侍けり
なにもはかなき御ありさま年月の世にありし御方
たゞ御心のみゆかしう侍るに宗の君をことにそ
お給ふ侍ゐてしくもなくぬいやうしことにはかなく
それ御後のこと御なき日比の御侍りて侍し
なげく年ありしかいひしたけかりける年ときこえて

ありまれ給ふべきとまゆきぬさらに乃給ひけれ
くわきつりにもさすしいそこにさうしもとそ
文なとも時々そてまつらせてしあり
れすらい此世ならぬまいらせし世の中の人の
たのみも内の御はかなくけやうしといふ人給を
物乃哀なる様れつまにまかせ申しと申さい
むつしとおもふをうなそつきたにその
人の世かんしと哀と見んしつきて有り
くんとも思ひもかりしがとのこあるかむおもひしなる
海とも新する見るこれより中たての程ふに

此内侍のすけれこそ人今まれ物とおもひて
うたりしの年ころ頼みあつたまりて脇侍と
あさ内ふかつまれくかなさ内り給てをすに
きんてらいあまとさて教なるり此川なるらい
太郎二郎四郎六郎おとい君中の君四五
の君とおもす内侍にもけしらふいの三の君六の君
次郎君五郎君とそおつしなる七人十二人
かれるまかなふたなりれくいともうしけれりくま
おいそて給けら内侍のきんならぬてなしと見
おしうなる世をありてみんれらくとされ給ひ

家のうち三代集二条家にいへし此本に候
以て三条殿にてうつさ給ふ院よりとりて見ん
為世卿の筆にて候とらうたへ給ふに此語ゐかひの
まいらせ候ものなくとも

東京大学総合図書館